

研究テーマ	つくりだす喜びを味わえる図画工作科の指導の在り方 —小学1年「いっしょにおさんぽ」の実践を通して—
-------	--

北茨城市立精華小学校 教諭 中村 和華子

I 研究テーマについて

近年、小学校の図画工作科の学習に関して、児童は生活や社会にどのように役立つかわからず、勉強する意義が感じられないということが様々な調査から分かっている。そこで、図画工作科の学習を始めたばかりである小学1年生の段階でつくりだす喜びを感覚的に味わえば、その後の図画工作科への意欲を高め、6年間の図画工作科の学習を通して主体的に判断する力へとつながると考えた。

そのため本研究は、第1学年「いっしょにおさんぽ」の実践において、教材や、活動の工夫を通してつくりだす喜びを味わえる図画工作科の指導の在り方を追求することを目的とする。また、仮説として、導入や初めの学習において使う前の粘土をほぐしたり、使いやすい大きさにしたりすることで指先だけの活動にならず手のひら全体を使え、より表現の幅も広がると考える。また導入、展開において、発想のヒントとなる話し合いや資料を提示すれば表現の幅が広がり、つくる喜びにつながるであろうと考える。

II 研究の実際

1 題材名 いっしょにおさんぽ

2 題材の目標 一緒に出かけたい仲間を思いつき、粘土の形を工夫して、楽しくつくることができる。

3 題材について

(1) 児童の実態

本学級は図画工作科の学習に対する実態調査で、図画工作の学習が「楽しい・どちらかといえば楽しい」と答えた児童は26人であり、図画工作科の授業に対して意欲的に取り組むことができる子供が多い学級である。しかし、絵を描くことが「どちらかといえば楽しくない・楽しくない」と答えた児童は2人であることに対して、粘土で物をつくる事が「どちらかといえば楽しくない・楽しくない」と答えている児童が8人と、粘土を楽しくないと感じている児童が多いことが分かる。

アンケート結果（平成28年度 6月5日 28名）

内容	人数			
	楽しい	どちらかといえ ば楽しい	どちらかといえ ば楽しくない	楽しくない
図画工作の学習は楽しいですか。	23人	3人	0人	2人
絵を描くことは楽しいですか。	23人	2人	1人	2人
粘土で物をつくる事は楽しいですか。	16人	4人	3人	5人

(2) 題材観

本単元では、学習指導要領第1学年の内容「A 表現」「(2) 感じたことや想像したことを絵や立体、工作に表す活動」の中の「ア 感じたことや想像したことから、表したいことを見付けて表すこと。」「イ 好きな色を選んだり、いろいろな形をつくって楽しんだりしながら表すこと。」「ウ 身近な材料や扱いやすい用具を手を働かせて使うとと

もに、表し方を考えて表すこと。」を受けて位置づけられている。散歩をする自分と、一緒に散歩をしたら楽しいと思う仲間を想像して立体に表すことで、立体としての力強さを感じるとともに、単体のものをつくることとは違う発想の広がりをおねらいとしている。

(3) 指導観

指導に当たっては、初めに「粘土体操」として、粘土の感触を楽しんだり、粘土で簡単な形をつくったりしてから作りはじめることで、その後の活動がスムーズにできるようにする。指先だけの活動で終わってしまわないように、粘土を箱からすべて出してから活動する。また、題材に合わせた大きさの粘土玉をつくってから始めることで極端に小さな作品にならないようにする。作り始めるときは、発想を引き出すヒントとなる写真や図鑑等を用意して提示する。写真などから自らの経験を引き出すことで、より自分が表現したいものが何か発想を導き出すようにする。鑑賞では、立体ならではの色々な角度から見てみるということを促していきたい。

4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
粘土で自分や一緒に出かけた仲間を楽しく作ろうとする。	一緒に出かけた仲間を思いつき、表すことができる。	手などの感覚を働かせながら、粘土の形や表し方を工夫できる。	つくったものの楽しさや面白さを友人と見つけることができる。

5 指導と評価の計画（2時間扱い）

時	主な学習活動と内容	評価の規準
1 2	<ul style="list-style-type: none"> 誰と散歩に出かけたか話し合う。 粘土で自分を作り出かけた動物や人を工夫しながらつくる。 自分の作品の工夫について話し、友達の作品を見ながら、気付いたことや工夫したことについて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 粘土で自分や一緒に出かけた仲間を楽しく作ろうとしている。 関【観察・作品】 一緒に出かけた仲間を思っている。 想【アイデアシート・作品】 手などの感覚を働かせながら、粘土の形や表し方を工夫している。 技【観察・作品】 つくったものの楽しさや面白さを友人と見つけている。 鑑【観察・鑑賞シート】

6 指導の実際

(1) 個々の実態調査

学習に入る前に、「1 図画工作の学習は楽しいですか。」「2 絵を描くことは楽しいですか。」「3 粘土で物をつくる事は楽しいですか。」「4 図画工作の学習で困っていることがあれば書きましょう。」という内容でアンケートをとり、本学級の児童の図画工作に対しての思いを調査した。また、事前に「粘土で好きな食べ物をつくる」という時間を設け、粘土を使う様子を調査した。そのアンケートと事前の学習から、本学級の児童に4つの問題点が見られ、特に顕著だった4人に焦点を当てた。

① 児童A

つくりたい物が思い浮かばず、つくる時間になると手が止まってしまう、不安気な表情になってしまう。

(アンケート結果) 1 楽しい 2 まあまあ楽しい 3 楽しくない 4 未回答

② 児童B

お手本と同じ物を書いたり、つくったりすることはとても上手で丁寧につくることができるが、近くの友達のまねをしてしまう。発想だけでなく、色や形までおなじにつくってしまう。

左が児童B、右が友人の作品



(アンケート結果) 1楽しい 2楽しい 3楽しい 4粘土でつukれない。

③ 児童C

形を上手につくることができる。指先で細かくつくることが多く、できあがった作品が小さいことや未完成で終わってしまう。友達同士で互いの作品を見合う場では、自分の作品が褒められなかったことが悔しいと、教師に話をした。

児童Cの制作の様子



(アンケート結果) 1楽しい 2楽しい 3楽しい 4時間が(友達と比べて)遅れること、どうやって作ればいいのかわからないこと。

④ 児童D

途中から飽きてしまい、雑になってしまうことが多い。つくるときに「やりたくない」、教師や友人に対して「(代わりに)つくって」と言う等、つくることに対して楽しさを感じられていない様子が見られる。

児童Dの制作の様子



(アンケート結果) 1楽しくない 2楽しくない 3楽しくない 4未回答

(2) 「いっしょにおさんぽ」授業の実践と児童の様子

活動内容	教師の働きかけ	児童の活動の様子
1 課題を確認し、話し合う。	・「さんぽ」から連想される「場所」や「人・動物」を児童に聞き、発表することで作品のイメージがつかめるようにする。	・多くの児童が手を挙げて、一緒に散歩に行きたい動物や、人を挙げた。
2 発想のヒントとなる資料を提示して、自由に見られるようにする。	・横に写真資料や図鑑などを並べておき、いつでも見られるようにしておく。	・写真資料を見ると、興味をもち、いろいろな写真や本をもってアイディアシートを描き始めた。

3 アイディアシートを書く。

- ・アイディアシートは、何枚でもいいとし、色は簡単に塗ってもいいが、後々作りやすいように形は丁寧に描くよう声掛けをする。



4 粘土を準備し、粘土体操をする。

- ・全体で、粘土体操を行う。粘土を押ししたり、ちぎったりしながら柔らかくする。



- ・粘土体操をして、拳大の粘土、粘土のひも、親指の大きさの粘土をそれぞれいくつか作り、その後の制作活動に生かせるようにする。
- ・前で、作った粘土玉を使い、つまんでのばし、手や足になる部分を作って見せる。また、それを立たせることで、作品の作り方をイメージできるようにする。

5 アイディアシートをもとに作品をつくる。

- ・決まったアイディアをもとに、制作していく。上手く立たせることができない児童には足に粘土を多くつけるよう声掛けする。



- ・写真を見ながら描いていた児童も、そのうち、自分の経験を思い出し、見ないで描き始める児童もいた。

- ・休み時間にも、描きたいという児童が多くいた。

- ・粘土体操で、力一杯粘土に触れることを楽しんでいた。

- ・自ら立って活動する児童もいた。



- ・「自分を立たせる」ことに苦戦する児童が多くいた。



- ・自分の作った作品を友達の商品のところへもっていき、人形遊びのように、楽しむ姿が見られた。

<p>6 つくった作品を紹介し、友達の作品を見て回る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデアシートにないものもどんどん増やしていいようにし、考えが詰まってしまったときは、資料を見に行くようにする。 ・でき上がった作品を机に並べる。 ・友達の作品を見て回る際に、作った自分をもって行き、友達のところで遊ばせる。その際、お友達が作ったものには触らないよう声掛けする。 	
---------------------------------	--	---

(3) 抽出児童の様子

① 児童A

アイデアシートでは、最初、写真資料を見て描こうとしていたが、うまくいかなかった。しばらくして、以前、描いたことのある「クワガタ」を自分の力で描き始めることができた。丁寧に描いたことを教師が褒めると、満足げな様子で、別の写真資料を見て新しい題材にも挑戦することができた。

粘土での制作では、迷いなくつくり進め、楽しそうに活動する姿が見られた。自分の作品を棚の上に運ぶときも、大切そうに運ぶ姿が見られ、自分の作品に対し、自信をもてるようになった。

児童Aの制作の様子



② 児童B

アイデアシートの段階では、隣の児童やなかよしの児童とはちがう、自らが好きな「りす」を選んで、作品を描くことができた。

粘土の制作でも、途中まで自分の考えでつくることができたが、教師が児童Bの近くにいた児童の作品を「手をつないでいるところが上手だね」と褒めると、同じように手をつなぐ姿にしてしまった。今回も、最後に友人の発想を取り入れてしまったが、原因が声かけにあることに気付くことができた。

児童Bの作品



③ 児童C

アイデアシートでは、興味をもってたくさん描くことができた。アイデアシートでも、描くスペースに対して小さく描いていなかった。粘土の制作では、粘土体操でつくったある程度の大きさの粘土玉からつくったため、大きさは、全く気にならな

児童Cの作品



った。シロクマをつくるときに、迷っていたが、うまく立たせることができると、笑顔が見られた。

④ 児童D

アイデアシートの段階で、魚の写真を選んで描いた。夏休みに、釣りに行ったことをよく話していたため、魚の写真や、図鑑を取り入れたところ、さっそくその写真を使ったり、興味を持って本をみたりしていた。今回は「できない」と教師に助けを求めることなく、黙々と作業を続け、大きな魚と自分を上手くつくることができた。

児童Dの作品



Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果

(1) 視覚教材の工夫

児童は、写真資料を基に経験を思い出したり、形が曖昧なときに写真資料をヒントとしたりして使用していた。また、アイデアが思いつかなくて困る児童が減った。

児童は、アイデアシートを描くことで、自分がつくりたいものを明確にする事ができた。さらに、アイデアシートで大まかな形を確認することができた。

(2) 活動の工夫

「粘土体操」として、粘土の感触を楽しむ姿が見られ、その後の活動へスムーズに移行できていた。その単元で使う手の動き（「つまむ」「のぼす」「おす」など）を粘土体操で使うことで、その手の動きを使ってつくる姿が多く見られた。

また、箱から出して、粘土をほぐしたことで、使う粘土が少量の児童や、極端に早くできあがってしまう児童が減った。

2 今後の課題

(1) 粘土体操をしていると、つくる時間がその分減ってしまうため、粘土体操を短時間で取り組めるよう工夫したい。

(2) 写真資料を用意することで、発想を引き出す手助けとなったが、あまり、考えないうちから、資料に頼ってしまう児童も見られたため、個々に応じて資料を与える時間を工夫し、考える時間も設けていきたい。

(3) アイデアシートを見て立体にすると、バランスが崩れてしまい、うまくいかないときがある。「アイデアシート通りにしないといけない」と思う児童もいたため、個別に声かけし、その場で出た発想も褒めていきたい。

(4) 教師の声かけで、作品が友達と同じ物になってしまう児童がいたため、かける言葉を個に応じたものにしていきたい。

Ⅳ 主な参考文献

- 1 「小学校学習指導要領解説 図画工作編 平成20年8月」(文部科学省)
- 2 「ずがこうさく 1・2上 たのしいな おもしろいな」(日本文教出版株式会社)
- 3 「図画工作 1・2上 教師用指導書 指導解説編」(日本文教出版株式会社)